

はしがり

徳川光圀は、江戸時代の数多い大名の中で、苦しい生活にあえぐ農民の生活を思いやり、とかく権力を乱用して、きびしい取り立てをしがちな役人をおさえて、仁愛の政治を行なった名君として知られている。「水戸黄門漫遊記」が今でも人気を博するのは、その表われであろう。しかし、江戸時代に善政をした大名は光圀一人ではない。たとえば、同時代に会津の保科正之があり、備前に池田光政があり、加賀に前田綱紀などがあり、降っては米沢の上杉治憲、熊本細川重賢、秋田の佐竹義和らをはじめ、各地に今もその恩恵を感謝される大名は決して少なくない。

また、徳川光圀は、幕府の政治が武断主義から文治主義に変わったころ、学芸復興の気運の中で頭角をあらわした学者、ことに近世の史学史上比類のない大著『大日本史』の編纂をはじめた先覚者としてその名を知らぬ者はない。その研究法の精密さは、近代史学の基礎を形成し、その集めた図書は今も学界の重宝とされるものが多い。しかし、当時の学界を見わたすと、江戸には林羅山・鶯峰などがいて官学派朱子学をにない、山鹿素行は兵学で天下第一といわれ、京都の山崎闇斎は何の権力も

たない浪人学者でありながら、朱子学と神道において官学に対抗する力をもち、町人の伊藤仁斎は朱子・陽明の学を批判して古学を唱え、近江聖人といわれた中江藤樹は農村に住んでわが国の陽明学をはじめ、備前の熊沢蕃山にこれを伝えた。

やや降れば室鳩巢・新井白石・荻生徂徠など、主義主張はそれぞれ違ったが、学問において一家をなすものはこの他にもきわめて多かった。また、歴史の書としては、巻数において『大日本史』にならぶものに、林家の『本朝通鑑』があり、小著ではあるが山鹿素行の『中朝事実』、新井白石の『読史余論』は、その史観に鋭さと卓見があり、幕末の飯田忠彦は、個人の力で二百九十余巻の『野史』を完成した。近世史学の業績としてあげられるものは、『大日本史』以外にも少なくないであろう。

このように、光圀は善政を行なった名君として必らずしも唯一の存在でなく、儒学・史学の世界でも無類の権威をもつものではなかったであろう。しかし光圀に独特なのは、その両者を一人で兼ね備えた点にある。しかも世間は、往々にしてこの点を見落とした。漫遊記の主人公として水戸黄門を慕う者は学者としての光圀の業績を忘れ、学者としての光圀に注目する者は水戸藩主としての、為政者としての光圀を軽視しがちである。光圀は実際にその両者を兼ねた。しかもどちらも人まかせではなかった。

ところが、光圀にはもう一つの立場があった。それは家康の孫であり、尾張・紀伊の両家とならぶ御三家の一人として、徳川幕府を構成する重要な要員であった。それでありながら、深く皇室を尊

び、天皇を主君として仰ぐことを自己の使命とし、誇りとしたことである。しかも家康以来幕府は、その権力の絶対化をはかるために、朝廷の大権を極度に制限し、諸大名はじめ万民が、皇室の権威を信奉することを最も警戒していた時、光圀はこれを意とせず、所信を貫いた。しかも光圀はただ個人の所信としてこれを貫くばかりでなく、積極的に大義を宣揚し、わが国史の特長を明らかにして、皇位皇統の絶対を天下に知らせようと努めた。

それは水戸藩の家訓となり、学問の骨髓となつて後世に伝えられ、いわゆる水戸学と呼ばれて、やがては天下に拡まつた。そしてついには徳川幕府のみならず、鎌倉以来六百年におよぶ武家政治を廃絶して、天皇の親政を復活しようとする、いわゆる王政復古の運動の強い原動力の一つとなつた。明治維新が達成されたのち、越前の松平慶永はその大業の根元を考え、それは徳川光圀一人の力から起こつた、と明言したのであつた。

もちろん、王政復古の原動力には、山崎闇斎以来脈々としてその志をうけついで崎門の流れがあり、契沖から荷田春満・加茂真淵と伝えて本居宣長によつて大成された国学の流れもあつた。しかしそれらの先覚は浪人であり僧侶・神官であり、町人であつて、光圀とちがい幕府権力と無関係か、またはその支配下にある者であつた。問題はそこにある。幕府権力の構成者、いや幕府権力そのものといつてよい御三家の大名水戸光圀が、一体どうして幕府を否定して王政復古を達成する源流を開いたのであろうか。

すなわち、善政をしいた大名、多くの著書を残し一派を開いた学者、幕府政治を否定する思想の源を開いた將軍家の近親、この三つの性格を一人で兼備したのが水戸光圀であった。こう言ってしまうまでもであるが、思えば不思議な人物である。常人の到底なしえないところであり、考えられないことでもある。ことに光圀は、なぜ本家の徳川將軍以上に皇室を尊んだのか、莫大な費用をかけて『大日本史』を編纂したのはなぜなのか、それだけの大事業を他からの財的援助もなしに進めながら、どうして農民をいたわり仁愛の政治をほどこすことができたのか、というような疑問に対して、どういふ答えがあるのだろうか。

光圀自身はその疑問に答える言葉を残しているだろうか。あるいは当時の近臣がそれをはっきりと後世に示しているだろうか。光圀の詩文集、伝記、言行録などは決して少なくはない。後世の史家が、追慕して著わした評伝や頌徳記も、終戦前までは随分と出版された。しかしそれらの書の大部分は、光圀の疑問を疑問とするよりも、不世出の英雄として驚き、大偉人として崇めた。そしてこのような人物を生んだ日本の歴史の輝かしさを讃え、奇跡の奇跡でない理由を誇ったのである。

ところが、近來の風潮はその偶像を認めようとはしない。あるいは光圀も農民を搾取した一封建領主にすぎないとし、あるいはその史学の業績も、封建思想による歴史解釈を出ぬものと言ひ、あるいはその尊皇も結局は、幕府権力維持のための手段にすぎないと断定するものさえある。しかもそれらの立論は、要は偶像を破壊し、英雄を抹殺しようとする意図によるものであって、徳川光圀の全人格

を究明し、その全生涯の業績を通観しての立論は、遺憾ながら一つもないといつてよい。多くは一面を見て他面を知らず、批判を先にして謙虚な探究を怠るものといわなければならぬ。

とはいうものの、私自身いまだに義公光圀を十分に理解し得たとは夢にもいうことはできない。光圀の作った文章には一字一句に寓意があり、言行・事業の一つ一つには隠された意味があるように思われて、史料を集め史実の探求に年を重ねてもなかなか近づくことができない。しかし、私は、日本人の先祖の心の深さをここに発見して無限の驚きを感じ、日本の歴史と文化の豊かさに随喜するとともに、このような人をかえりみることなしに、ただ新しいものを追ひ、外国の文明に心酔する現代日本の深い眠りをなさげなく思うのである。

この小著は私が今までに理解し得た水戸光圀の輪郭にすぎないであろう。それでも私は、光圀の生まれた時代やその歴史的・地理的環境から、年次を追ってその生涯をたどって行くうちに、いくつかの点で、光圀のいっていた識見と念願を明らかにすることができたつもりである。これが機縁となつて、水戸光圀とその果たした役割が、より一層明らかにされる日の来ることを祈つてやまない。

昭和四十七年四月二十日

水戸 千秋齋において

名 越 時 正
な ぎや とま まさ

※本データの全部または一部を無断で複製・転載・改竄・公衆送信・
本データを第三者に譲渡することは有償無償に関わらずご遠慮くだ
さい。

個人利用の目的以外で複製や第三者へ譲渡は著作権法などの関
連法によって禁止されています。